

# ラカポシ南壁初登攀 Rakaposhi Expedition 2019

中島 健郎



平出 (左) と中島

## ●メンバー

平出和也 (ICI 石井スポーツ所属)、中島健郎

## ●はじめに

当初の目的はヒンドゥークシュ最高峰のティリッチミール (7708m) であったが、現地で登山許可を待ったにも関わらず、残念ながら今年には許可が出なかった。そこで代替案のラカポシ南面へ転進となった。ラカポシといえばフンザからの美しく望める山で有名である。パートナーの平出にとってフンザは第2の故郷と言えるほど通っており、そこから見える山を登る事がライフワークとなっていた。その中で最も目立つラカポシが残されていたので、どこか面白いルートはないかと探したら、南面はまだ手付かずだった。初登頂を狙っていた頃にはもちろん南側も偵察に入っていたようだが、登攀ルートが見出せず他に移っている。

## ●偵察

許可待ちのために、先にラカポシ南面の偵察へ入る。アプローチとなる Danyore 谷はギルギットからとても近くジープエンドまで約 40 分。この谷は夏場のみ、放牧のためにふもとの村から多くの村人がヤギや牛、ヤクなどを連れて上がってくる。そのため、ずっと放牧の道でトレースがはっきりしていてとても歩きやすい。ス

ルギン氷河右岸のどん突きまでは 20km 弱で標高こそ 3660m と低い、ポログラウンドのような草原で、木も豊富にあり、水も流れている。これ以上は荷物の運搬も動物では厳しくなりそうなので、ここを BC 予定地として引き返す。肝心の壁は山頂まで一応見渡せたものの、上部に多くのセラックを抱えた南面は登攀ルートが極端に限られる。候補として4つほどのルート取りを考えていたものの、結果的には1本あるかないか。とりあえず可能性は見出せたので一安心してギルギットへ戻る。

許可の返事に期待して街に戻ったものの、結局まだ動きがない。二晩待ってはみたものの、遂に現地エージェントから「今年は厳しいかも」との通達があり、即座にティリッチミールを諦めラカポシへ入ることにした。チトラルで待っていたガイドを呼び出し、買出しとブリーフィングを済ませ再び BC に戻ったのは 6 月 16 日。10 日ほどロスしてしまった。

## ●登山活動

ギルギッドで待っている間、天気はそれほど悪くなかったが、入山3日後から一週間ほど雨や雪となっている。この好天を逃すとまた天気待ちになりそうなので、BC 到着翌日から、2泊3日で順応と偵察のために上部へ上がる。スルギン氷河のアイスフォールは多少迷路に



はなっているものの、通行不能な箇所は無く、ジャンプでやり過ごせる程度。ただデブリや落水地帯を通過する場所もあり、気持ちよくは無い。4500m、5900m で1泊ずつ泊まり、6100m までタッチして BC へ戻った。ルートの目処は一応立ったものの、順化はまだイマイチだが、あとは天気次第となる。

BC へ戻った翌日から予報通り雨やみぞれ。しかも6日間降り続く。7日目には久しぶりに晴れたが、壁にはべったり雪が積もっており雪崩の音がよく聞こえる。いつの間にか残す登山日数は、登頂ステージのみとなってしまった。予報ではこの先2~3日は曇り、その後一旦崩れて好天が来る。また崩れる前に、雪崩の危険性が高い下部を通過して、上部で天気待ちをして好天を掴むタクティクスとする。

1日雪が安定するのを待って、27日曇り空のなか出発。今回、岩ギアはすべて BC に置いていくものの、6泊7日分の食料と燃料は久しぶりに肩に食い込む。1週間ぶりのアイスフォールは雪崩やセラック崩壊の痕跡が増えていた。氷河迷路を越え、岩壁を右から回り込み、雪稜へ出る。ナイフリッジを越えたコルでリッジを切り崩し 5200m で幕営 (C1)。順応時と同じルート取りなのでスピードは速く、初日は標高差 1500m を稼ぐ。

2日目は雪壁からセラックの横を越え、雪稜、雪壁と続く。6日間の悪天で前回のトレースはもちろん消えており、ただひたすらラッセル。途中で先頭は空荷になってラッセルするほど。それでもなんとか 1000m 登って、

6200m で幕営 (C2)。

3日目はようやく南東稜へ上がる。稜へ上がる直前が氷壁となっていたが、スクリーで確保しながら登る。南東稜へ上がると今まで隠れていた北東面の景色が一気に広がり、ディランやキンヤンキッシュがよく見える。今日中に山頂へ登れてしまうのではないかと錯覚するほど近くに見えるが、手元の高度計は嘘をつかない。稜線は雪が締まっているという期待はあっさり裏切られ、南東稜上もしっかりラッセル。本日は 600mUP で稜線を切り崩し 6800m で幕営 (C3)。予報よりも一日天気が持ったものの、4・5日目と雪が降り、

視界が悪いため停滞。次の好天は丸二日も持たなさそうなので、ここを最終キャンプとして 1000m のアタックにかける。

7月2日4時、満点の星空のなか出発。頂上稜線までは特に難しい箇所は無く、ただひたすらラッセルとなる。稜線に出る箇所は、雪庇の間を縫って上がる。その先は一見岩場となっているが、一段下ると広い雪面となり、大きく西側から巻けた。稜線上は西風の影響でようやく雪が締まってきた。遠くから山頂のように見えているピークは、過去の経験からしてニセピークのことが多いので、期待せずにとりあえず忠実にたどる。すると、いきなり斜面がスッパリ切れ落ち眼下にフンザが見えた。12:00、そこが山頂だった。

登山中で一番の好天に恵まれ、360度の絶景が広がる。一昨年登ったシスパーレ山頂からの視界は無かったものの、今はよくシスパーレが見える。遠くにはひと際貫禄のある K2 まで見えた。帰路は往路を下降して、C3 で1泊し、翌日 BC まで下山した。

今回の南面新ルートは技術的にそれほど難しい箇所は無かった。しかし、BC から山頂までの標高差は 4000m を越え、さらに悪天続きで雪の処理やルートファインディングに苦勞させられた。パキスタンはネパールの乾期のように、スカッと晴れが連日続くことがなかなかない。そのため、今回は最終キャンプで3泊粘ったのが成功のカギとなった。

## ■中島健郎 (なかじま・けんろう)

奈良県出身、1984年10月19日生まれ、関西学院大学山岳会所属。関西学院大学に入学と同時に山岳部に入部し登山に没頭する。在学中に3度の海外遠征を経験して、未踏峰2座の初登頂に成功。卒業後、主として海外登山やトレッキングのコーディネート会社(ウェクトレック)に所属して、竹内洋岳の14projectや日本テレビ「世界の果てまでイッテQ!」登山部班に同行して山岳撮影やサポートを行う。現在はフリーで山岳カメラマン・山岳サポートとして活躍する。2017年シスパーレ北東壁初登攀でピオレドールを受賞(2017年ピオレドールアジア、2018年ピオレドール)。

## ■主な海外登山歴

- 2006年 パンバリ・ヒマール (6887m) ネパール 日本山岳会学生部隊 初登頂
- 2008年 デインジュンリ (6196m) ネパール 関西学院大学隊 初登頂
- 2009年 マッターホルン (4478m) スイス 単独登頂
- 2011年 チョー・オユー (8501m) チベット 竹内洋岳隊 登頂
- 2011年 ラルキャ南峰 (6056m) ネパール チーム本多隊 初登頂
- 2015年 アビ (7132m) ネパール 南西壁取り付けず、北稜より登頂
- 2016年 ルンポ・カンリ (7095m) チベット 平出和也ペア隊 北壁初登頂
- 2017年 シスパーレ (7611m) パキスタン 平出和也ペア隊 北東壁初登頂
- 2018年 エベレスト (8848m) ネパール 倉岡裕之隊 登頂
- 2019年 ラカポシ (7788 m) パキスタン 南壁初登頂

## <日程>

- 6月3日日本-イスラマバード(中国国際航空)
- 6月6日イスラマバード-ギルギッド【1500m】(陸路)
- 6月7-9日ラカポシ南面偵察
- 6月16日BC【3660m】入り
- 6月17-19日順化・偵察
- 6月20-26日BC 停滞
- 6月27日BC-C1【5200m】
- 6月28日C1-C2【6200m】
- 6月29日C2-C3【6800m】
- 6月30日C3 停滞
- 7月1日C3 停滞
- 7月2日C3-ラカポシ山頂【7788m】-C3
- 7月3日C3-BC
- 7月5日ギルギッド着
- 7月7日イスラマバード着(国内線)
- 7月9日イスラマバード発-(中国国際航空)
- 7月10日-日本